

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520612

研究課題名(和文) 認知言語学の概念<事態把握>と日本語教育－韓国語母語学習者を対象に－

研究課題名(英文) The Concept of Cognitive Linguistics <Construal> and the Teaching of the Japanese Language- a research targeted at Korean-native learners of Japanese

研究代表者

近藤 安月子 (Kondoh, Atsuko)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：90205550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：韓国語母語日本語学習者の<事態把握>の傾向を日本語母語話者のそれと対照する目的で言語調査を行い、量的・質的に分析した。その結果を本研究第一段階(基盤(C)課題番号19520445(2009～2011 研究代表：近藤安月子))で明らかにした中国語母語日本語学習者の事態把握の傾向と対照させ、量的・質的分析を通して、日本語、中国語、韓国語の<事態把握>の傾向差を明らかにし、相対的距離の可視化を行った。その結果、合計11の調査項目のうち10項目において日本語母語話者が最も主観的把握傾向を示し、中国語母語日本語学習者の方が韓国語母語日本語学習者より日本語母語話者からの距離があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the project was to identify by contrastive language surveys the construal type of the Korean-native learners of Japanese language relative to that of the Japanese native speakers. The results showed that construal type of the Korean-native learners of Japanese tended to be more "objective" than that of the Japanese native speakers.

The results were then compared with those of the preceding study on the construal type of the Chinese-native learners of Japanese(Kiban(c)project No:19520445). Through quantitative and qualitative analyses the relative distances of the three languages on the construal scale were obtained as that Japanese was the most subjective, Chinese the least subjective and Korean fell in between.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育 対照言語研究 事態把握 教科書分析

1. 研究開始当初の背景

基盤(C)課題番号 19520445(2009～2011 研究代表：近藤安月子)で、中国語母語日本語学習者と日本語母語話者の事態把握の傾向差について明らかにしたが、本研究は、その第二段階と位置づけ、韓国語母語日本語学習者の事態把握の傾向を日本語母語話者のそれと対照分析することとした。

2. 研究の目的

韓国語母語日本語学習者の産出する日本語に観察される、日本語の好まれる言い回しからの逸脱が池上嘉彦(2011) (「日本語と主観性・主体性」澤田春美(編)『ひつじ意味論講座5 主観性と主体性』pp.49-67、ひつじ書房)の<事態把握>の傾向差によるものであるという仮説のもとに、韓国で開発された日本語教材に見られる<事態把握>の傾向と、韓国語母語日本語学習者の<事態把握>の傾向を明らかにすることを第一の研究目標とした。次に、研究第一段階の日中対照分析結果と統合して、日本語母語話者、中国語母語日本語学習者、韓国語母語日本語学習者の<事態把握>の傾向差を明らかにし、それに基づいて、<主体的把握>に関する三言語の相対的距離を可視化することを第二の研究目標とした。

3. 研究の方法

3.1 教科書調査

韓国ソウル市に所在する大学 16 校の日本語授業の教材の情報を収集し、それらの大学で日本語主専攻・副専攻生対象に使用されている、韓国の大学で開発された日本語初級および中級教材を選定し、その記述に日本語の<好まれる言い回し>からの逸脱があるかどうかを分析した。

分析対象としたのは以下に挙げる 17 冊で、2000 年代の比較的新しい教科書が中心である。

『初級現代日本語』(2003) 韓国外国語大学
『日本語中級購読』(2003) 韓国外国語大学

『日本語中級読』(2003) 韓国外国語大学
『日本語文章練習』(2005) 韓国外国語大学
『基礎日本語講座』(2001) Kyun-Hee University

『初級日本語会話 1,2』(2006) Kyun-Hee University

『日本語基礎表現 1,2』(2011) Sung-Shin Women's University

『初級日本語練習 1.2』(2007) Sung-Shin Women's University

『日本語中級表現 1,2』(2009) Sung-Shin Women's University

『うきうき日本語 上下』(2006) Kon-Kuk University

『初級日本語会話』(出版年不詳) 高麗大学

『中級日本語会話』(出版年不詳) 高麗大学

『初級日本語作文』(出版年不詳) 高麗大学

3.2 日韓対照アンケート調査

中上級から上級の韓国語母語日本語学習者と日本語母語話者を対象にしたアンケート予備調査、初級修了から中級の韓国語母語日本語学習者を対象としたアンケート本調査を実施した。

実施にあたって、日中対照の先行研究で使用した言語項目を、日韓対照調査でも<事態把握>の違いが反映する可能性のある言語項目であると判断して、日中対照研究に準じて、次にあげる(1)～(11)を分析対象に選定した。

分析対象：

- (1)移動、(2)授受、(3)誘いかけ、(4)直接受身、(5)間接受身、(6)自他動詞の選択、(7)<私>のゼロ化、(8)情意の表出、(9)コト的把握、(10)無助詞による提題化、(11)<あなた>のゼロ化

これら11項目について計23問のアンケート形式による質問票を作成した。23問の内訳は、ある会話の中の発話として示された複数の選

択肢についてその適切性を判断する課題16題、空所を埋めて会話を完成する課題3題、一連の会話が表す状況を日本語で記述する課題1題、イラストが表す状況を描写する課題3題である。このうち、イラストを描写する課題は、日本語だけでなく韓国語でも描写するように指示した。

上記の質問票を用いて、まず 2012 年 1 月から 2 月の間に日本在住の韓国語母語日本語学習者(中上級から上級の大学生、以下「韓 1」)74 名、日本語母語話者 113 名(大学生、以下「日」)を対象に予備調査を実施した。本調査は、予備調査を踏まえ、2012 年 9 月から 10 月の間に、韓国在住の韓国語母語日本語学習者 244 名(初級修了から中級の大学生、以下「韓 2」)を対象に実施した。

いずれの調査についても、調査協力者の背景情報を含む調査結果をデータベース化し、適切性判断課題では、各選択肢の適切性判断平均値を統計処理(Mann-Whitney のU検定、使用統計分析ソフト R2.15.0)して、母語話者による判断との差が有意かどうかを見た(有意水準 0.05>p)。

韓国語記述課題については逐語的に翻訳した上で、自由記述課題とともに、回答を類別し分析を行った。

本調査の分析では、予備調査の結果を参照しつつ、適切性判断課題の結果に量的分析を施し、自由記述課題および中国語記述課題については、韓国語母語日本語研究者の協力の下に、質的分析を行った。

3.3. 日中韓対照分析

3.2 の日韓対照調査の結果を、本研究の第一段階の日中対照調査の結果と統合して、両調査の結果を相対的に分析した。この分析では、母語の事態把握の傾向がより影響を及ぼすであろうと判断される初級修了から中級学習者のデータを使用した。以下、初級修了から中級の中国語母語日本語学習者 330 名を

「中 2」と表記する。「中 2」「韓 2」「日」の結果をデータベース化し、適切性判断課題では、3.2 と同じ統計的処理を施し、「中 2」「韓 2」「日」の適切性判断に有意差があるかどうかを見た(有意水準 0.05>p)。

また、複数の設問がある項目「移動」(2問)とヴォイス(直接受身、間接受身、自他動詞の選択)、および調査項目のうち適切性判断課題のすべてについては、<事態把握>のスケールの観点から、「中 2」と「韓 2」が、「日」に対してどのような相対的な位置関係にあるかを可視化するために、多次元尺度構成法(Multi-dimensional Scaling, MDS)を用いて分析した。

4. 研究成果

4.1 教科書調査の成果

韓国の大学で使用されている教材のうち、韓国の大学で開発された日本語教材 17 種を対象に分析した結果、日本語母語話者に不自然に感じられる例文・記述はほとんど観察されなかった。この結果から、日本語学習・習得への日本語教材の干渉については、本研究の考察に関連する要因ではないと判断した。

4.2 日韓対照アンケート調査の成果

韓国語母語日本語学習者の産出する日本語に、いわゆる日本語母語話者にとっての<好まれる言い回し>からの逸脱の傾向が観察されるであろうという予測のもとで 3.2(1)に挙げた 11 項目について調査を行ったところ、以下の結果が得られた。

「日」と「韓 1」の対照分析結果では 11 項目中(10)「無助詞による提題化」と(11)「あなたのゼロ化」を除く 9 項目で、「日」と「韓 2」の対照分析結果では、11 項目すべてで、有意差が観察された。「方向性」とヴォイスにかかわる 4 項目では、「日」が「韓 1」「韓 2」より主観的な事態把握の傾向を示した。

また、「韓 1」と「韓 2」の間に有意差が観察された 4 項目(1)「移動」と(4)直接受身、

(5)間接受身、(6)自他動詞の選択については、学習段階が上がると「日」の事態把握の傾向の獲得に近づき、自他動詞の選択については、日本語の学習段階が上がっても母語の「事態把握」の傾向が維持される可能性が示唆された。

4.3 日中韓対照分析の成果

<事態把握>のスケールを想定した上で、「日」「中2」「韓2」を対照分析した結果から、次のことが明らかになった。

- 1) 調査項目(8)の「情意の表出」以外では、「日」がもっとも主観的把握の傾向を示した。
- 2) 「中2」「韓2」が「日」から同程度の距離を示した項目： 直接受身、誘いかけ
- 3) 「中2」のほうが「韓2」より「日」から遠い項目： 移動、動詞の自他、コト的把握、<私>の顕在化
- 4) 「韓2」のほうが「中2」より「日」から遠い項目： 間接受身、無助詞による提題化、授受(与益)、<あなた>の顕在化

なお、1)の「情意の表出」のみ本研究の予測と反するが、これについては、「中2」が使用した教科書や教室活動による学習効果が要因として考えられる。

最後に、移動、ヴォイス、調査項目全体のMDSによって<事態把握>に関する三言語の相対的距離を可視化した結果は、「中2」「韓2」ともに「日」から距離があるものの、全体として「中2」のほうがより「日」から距離があることを示唆した。

以上、<事態把握>に関して、研究第一段階の日中対照調査研究、第二段階である本研究の日韓対照調査研究、およびこの二つの研究結果を統合した日中韓の傾向差と相対的距離について、ほぼ研究仮説を支持する結果

を得ることができた。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- (1) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2014)
「韓国語母語日本語学習者の事態把握 - 日韓対照言語調査の結果から - 」『認知言語学会論文集』、査読あり、第14巻、(印刷中)
- (2) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2013)
「韓国語母語日本語学習者の事態把握 - 中・上級学習者の場合 - 」『日本語学研究』、査読あり、36巻、韓国日本語学会、pp.81-99

[学会発表](計4件)

- (1) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2014)
「中韓母語日本語学習者と日本語母語話者の事態把握傾向」、International Conference on Japanese Language Education 2014、2014年7月10日~12日、シドニー工科大学(Sydney, Australia)(発表予定)
- (2) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2014)
「中国語・韓国語母語日本語学習者の日本語文適切性判断 - 事態把握の比較を中心に - 」日本語教育学会 2013年度第10回研究集会、2014年3月8日、園田学園女子大学(兵庫県尼崎市)
- (3) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2013)
「韓国語母語日本語学習者の事態把握 - 日韓対照言語調査の結果から - 」日本認知言語学会大14回大会、2003年9月21日~22日、京都外国語大学(京都市)
- (4) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2012)
「韓国語母語日本語学習者の事態把握 - 中・上級学習者の場合 - 」韓国日本語学会第26回学術発表会、2012年9月14日~15日、Hanbat大学(大田市、韓国)

〔図書〕(計1件)

- (1) 近藤安月子・姫野伴子編著(足立さゆり
他1名の分担執筆)(2012)『日本語文法
の論点43 - 「日本語らしさ」のナゾが氷
解する』、研究社、235頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 安月子(KONDOH ATSUKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号： 90205550

(2) 研究分担者

姫野 伴子(HIMENO TOMOKO)

明治大学・国際日本学部・教授

研究者番号： 00228751

足立 さゆり(ADACHI SAYURI)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号： 70307106

(3) 連携研究者 なし

研究協力者

斉藤明美

翰林大学校日本語学科・教授

趙大夏(チョウ・テハ)

ソウル女子大学校日語日文学科・教授

任栄哲(イム・ヨンチョル)

中央大学校文科大日語日文学・教授

黄昭淵(ファン・ソヨン)

国立江原大学校人文大学日本学科・教授

金仁珠(キム・インジュ)

翰林政審大学校観光日語通訳科・教授

蘆娃鉉(ノ・ジュヒョン)

高麗大学校言語情報研究所・研究教授